

能と絵画「弱法師」

下村観山の大作、六曲一双屏風の「弱法師」を見た驚きは忘れがたい(図A)。所蔵館東京国立博物館の巨大な展示ケースの底に静まり返っていた。なんといってもこの弱法師の独特な姿に驚く(図B)。「能「弱法師」の清澄、風雅な青年とは程遠い。髪の毛乱れ、粉を吹いたように白濁した顔貌、薄い口ひげまで描かれてある。やせ細った手首、足指、物乞いのような両手、最下層民の草履をはく汚い男である。とまず見えた。なによりも能「弱法師」の能面とはいたく違ったリアルな乞食の相貌にどきりとさせられる。

これはたしかに天王寺に蝸集する乞食たち、そのなかでも盲目という重度の障害を負わされた弱法師の実像だろう。観山はどうして能の「弱法師」をこんな青年像で描いたのだろう。これは能の雅な表現を否定しようとしたのだろうか。弱法師の正体はこれですと暴露しようとしたのだろうか。しかし絵画は一見、二見でその本質を了解できるものではなく、それはまさに能と同じである。気が付くとこの弱法師は見事な能衣装をまとっている。着付は小格子厚板風、腰にまとうのは流水に葦紋様の縫箔、表着はよれよれに裂けてはいるが水衣である。

金地屏風の画面にただ一人立つこの乞食は能の主人公の弱法師だったのだ。なまなましい人間の相貌は観山がこの能の本質として受け取ったものだろう。能の上演にこの「汚く」「あわれな」青年を重ねてみる。能の美学に、はてしない人間悲劇の深みが加わる。

(図A)「弱法師」(東京国立博物館蔵)



右隻



左隻

京都聖母女学院短期大学名誉教授 藤岡道子

この一対の大画面屏風に描かれているのは、弱法師と満開の梅の古木と落日のみである。左隻には右隻からつづく梅の枝と大きな赤い日輪。左隻左半分の中央下方に描かれた日没の色相がものすごい。盲目となった弱法師の心眼が見ている日輪、日想観の場面だったのである。

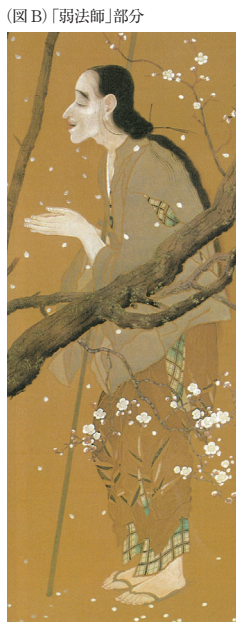
下村観山(明治6(1873)〜昭和5(1930))は紀州藩抱えの幸清流小鼓方の家を出で、東京に移り幼少より画才を称えられた。本作品は大正4(1915)年、42才の作。引用の『現代日本の美術 第一巻』(集英社1976)の解説者の美術史家永井信一は次のように書く。「観山は謡曲の物語を好んで画の主題にしたが、謡曲と絵画がひとつになって、これほど美しい荘重な響きを放っているものはない。」「謡曲本文に踏み込んだ解説ではないが本画に「壮嚴、幽玄、清麗な世界」を読み取っている。

観山にもう一作、弱法師を描く作品がある。「俊徳丸」と題する作品で大正11(1922)年、観山49才の作(図C)。うすく着彩されているがほとんど墨線の描画。屏風ではかすかに描かれていた微笑がここでは消え、両眼は薄墨で塗られている。かぎりなく暗い。永井信一は「師(藤岡注・岡倉天心)を亡くして心の放浪つづける観山自身の心境を託したものか、とする。

能「弱法師」は「家を追われて盲目の乞食となった少年を描くのだが、暗く悲惨には描かず、逆境を超越して澄みきった諦観の中に住む美少年」の描出を主題とする(『日本古典文学大系 謡曲集上』解説)。しかし観山の弱法師は能の再現ではない。観山の心が読んだ弱法師である。梅花の下、盲目ながら入日を拝む弱法師も観山、何も見えず、行先も見えない弱法師もまた観山。能がどう鑑賞、受容されるのかを知る手立ては能評ばかりではない。観山の

弱法師は「受け取る心」もまた能なのだということを伝えている。本日は宝生流の大坪喜美雄師、大倉流小鼓方久田舜一郎師の一調名場面を「聞く」至福の時である。「弱法師」上演を思い浮かべ、観山の弱法師を去来させて、私だけの弱法師像を結ぼう。

さて終わりに。下村観山の長兄下村清時(きよとき)(明治元(1868)〜大正10(1921))もまた能面師として名高い。清時の妻女は廣田幸稔夫人一恵の祖母の姉である。これは廣田家ファミリー・ヒストリーですね。



(図B)「弱法師」部分



(図C)「俊徳丸」(日本美術院蔵)